

—気象講演会雑感—

平成13年度気象講演会開催報告

講演会担当幹事 網藏 真  
(財団法人 日本気象協会北海道支社)

平成13年度の気象講演会はテーマ「北海道の空・海・大地」をかかげて函館で開催した。この道南は大雨などの気象災害や駒ヶ岳という活火山を抱えて防災上重要な地域であると同時に、一方では豊かな水産資源に囲まれて観光客が多く訪れる地でもある。まさに空・海・大地の接点といえるところであり、今回は啓蒙普及を一層強化するために学会の気象講演会と函館海洋気象台の防災気象講演会を共同で行うことにした。

講演会の内容は以下のとおりである。

日時：平成13年10月20日(土) 13時00分～16時30分

場所：函館市 ホテル法華クラブ函館(函館市本町27-1)

主催：日本気象学会北海道支部、函館海洋気象台

共催：函館市

後援：渡島支庁、NHK函館放送局、北海道新聞函館支社、函館新聞、日本気象協会函館支店

講演：テーマ「北海道の空・海・大地」

(1)「函館周辺の気象特性と気象災害」

小林 雅(函館海洋気象台 観測予報課)

(2)「気候が変わると海の生物はどうなる?—北太平洋の生物資源変動予測—」

岸 道朗(北海道大学大学院水産科学研究科)

(3)「火山との共生—有珠山及び駒ヶ岳の噴火からのメッセージ—」

岡田 弘(北海道大学大学院理学研究科地震火山研究観測センター)

小林氏の講演では、渡島桧山地方における典型的な大雨及び大雪の気象災害事例が天気図などを用いて解説された後、函館海洋気象台の防災への取り組みが紹介されたので、気象警報等情報の意味と背景が大変に良く分かった。

岸氏の講演では、北太平洋の生態系が気候変動によりどのようになるか、気候と海洋と生物の関係についてコンピュータモデルによる最新の研究が紹介された。温暖化は気温上昇、海面上昇、紫外線増大だけでなく、多方面が相互に影響し合うという複雑な問題のあることを実感した。

岡田氏の講演では、2000年の有珠山噴火予知と防災は一朝一夕に達成されたわけではなく、それ以前の30年間に渡る北大など関係者の努力により、最終的には住民、行政、マスメディア、科学者から成る正四面体の連携が十分に機能したことにあると強く指摘された。

3氏の講演をふり返ると、共通点としては、今日明日の災害から数十年かけて起こるかもしれないことも、今出来る事から開始すべきという旗幟(きし)を示したことにあるのではないかと深く考えさせられる。

さて、このように講演内容が興味深く身近なものであったため、講演会の参加者数は153名と大変多くの方に集まって頂き活発な質疑応答が行われた。特に、駒ヶ岳周辺の町村など防災関係者の参加が目立ち防災意識の高さを感じつつ盛況のもとに講演会を無事終了することが出来た。

最後に、参加頂いた多くの方々、講師の方々含めて関係各位に感謝する次第である。